市政ニュース

～条約湿地「円山川下流域・周辺水田」を高く評価～ ラムサール条約事務局長が豊岡を視察

「円山川下流域・周辺水田」は、平成24年7月に開催されたラムサール条約第12回締約国会議で、条約湿地に登録されています。

4月7～8日、ラムサール条約事務局（スイス）の事務局長であるクリストファー・ブリッグスさんが、日本の条約湿地の特徴的な取り組みを知るため、本市に来訪しました。

ハチゴロウの戸島湿地や田結湿地などを視察した事務局長は「多様な生物が生息し、人が近くに住む素晴らしい湿地」と話しました。

この視察は、事務局を通して昨年から2カ年間の採択が決まった海外ファンド事業（ラムサール・ダノンエビアンプログラム）の現地視察も兼ねており、休耕田の湿地づくりに取り組むNPOや田結区住民などとの意見交換も行われました。

翌日には、県立コウノトリの郷公園などを訪れ、中貝市長とも懇談。「豊岡の取り組みは、多様な主体の連携により湿地を増やし、洪水対策と生物多様性の保全が図られていることが特筆すべきことだ」と、高く評価されました。

▲現地視察するクリストファーブリッグス事務局長

【ラムサール・ダノンエビアンプログラム】

ミネラルウォーター「エビアン」で知られる、フランスの会社ダノンが基金を拠出し、ラムサール条約事務局と連携して地球規模で水資源保護に取り組むもの。本市では、NPOコウノトリ湿地ネットがその資金を活用し、湿地や里山再生に取り組んでいる。

災害時における「LPガス」、「畳」の支援協力協定締結

市は、3月20日、災害時の支援協力協定を締結しました。

▲協定書に署名する三輪正彦支部長（左）と中貝市長

「兵庫県LPガス協会但馬支部」からは、避難所等へのLPガスおよび燃焼機器等の資機材の優先提供と運搬などの支援協力を受けます。

また、「5日で5000枚の約束。プロジェクト実行委員会」からは、避難所等に無償で畳を提供いただく他、利用後の畳処理も協力いただきます。

▲実行委員長の前田敏康さん（左）と中貝市長

～積雪対応も経験を生かして～ コウノトリ但馬空港地場ソーラー竣工式を挙行

市は、3月28日、コウノトリ但馬空港地場ソーラー竣工式を挙行しました。

▲滑走路の近くに太陽光パネルを設置

太陽光パネル製造メーカーが市内に立地する条件を生かし、県有地を無償で借り、市内金融機関の協力を得てリース方式で運営します。〝産官金〟が連携して、経済の域内循環に寄与する仕組みになっています。

また、このソーラーの一部が、災害時に非常用電源として利用できることも大きな特色です。

～主な市政の動き～

【3月】

13日・豊岡市くらしの便利帳2014発行
18日・2013「植村直己冒険賞」授賞者発表
20日・災害時における支援協力協定を「兵庫県LPガス協会但馬支部」、「5日で5000枚の約束。プロジェクト実行員会」と締結
21日・奥山地区地域再生拠点施設竣工式
22日・「環境大臣賞　グッドライフ特別賞」を受賞
23日・まちなかステーションオープニングセレモニー
28日・コウノトリ但馬空港地場ソーラー竣工式
29日・電気自動車用急速充電器設置
30日・日高防災公園まゆの里竣工式

【4月】

7日・ラムサール条約事務局長が視察（～8日）
10日・豊岡農業スクール入校式
12日・アルチザンスクール開校式

「Good Life AWARD」で「自然に抱かれて生きる豊岡の暮らし方」が「環境大臣賞　グッドライフ特別賞」を受賞

市が東北大学大学院環境科学研究科の石田研究室・古川研究室と共同で進めている、ライフスタイル・デザインの取組み「自然に抱かれて生きる豊岡の暮らし方」が、環境省が主催する「Good Life AWARD」で、「環境大臣賞　グッドライフ特別賞」を受賞しました。

3月22日、六本木農園（東京都港区）で表彰式が行われ、真野副市長が出席しました。

【豊岡市の取組み】

将来の厳しい環境制約下でも、楽しく、ワクワク・ドキドキ暮らすにはどうしたらよいかを東北大学と市役所若手職員、環境経済認定事業者で検討しました。「とよおかの食材でつどう暮らし」「生命の循環を感じる暮らし」など、70を超える新ライフスタイルを提案しました。

【グッドライフアワード】

環境への負荷をより少なくし、地球の恩恵を持続的に受けることができ、それを誰もが「楽しい」「幸せ」と感じられる〝良い暮らし〟実現のためのアイデアや仕組みを多くの生活者や各種団体・企業から募り、表彰する。平成25年度は147件の応募があり、うち10件が受賞しました。

▲環境大臣から贈られた賞状

～「豊岡エコバレー」＋誘客促進～ 24時間使える電気自動車急速充電器を設置

市では、環境都市「豊岡エコバレー」の実現を目指し、排気ガスを出さない電気自動車の普及促進を図り、地球温暖化防止に努めています。

3月29日、道の駅「神鍋高原」（日高町栗栖野）に、電気自動車用の急速充電器を設置しました。

市が設置する急速充電器は、シルク温泉に次いで2カ所目。

▲中貝市長が初充電を行いました

充電器本体に蓄電池を搭載している高機能機種で、入力電力が少なくても蓄電池のアシストで出力が大きくなります。

また、災害等で停電した場合、内蔵の蓄電池が使用でき、標準的な一般家庭約1日分の電気が使用できます。

これにより、走行距離の短い電気自動車の利便性を向上させ、京阪神や山陰地方から本市への誘客、市内回流が進むことも期待しています。

中貝市長の徒然日記 ㉘

コウノトリの冒険

かっ！快挙です。豊岡生まれのコウノトリが、3月18日、韓国慶尚南道金海市にいることが分かりました。2012年に出石町伊豆の人工巣塔で生まれたメスです。昨年12月4日に山口県長門市で目撃された後、行方が分からなくなっていました。

その長門市は安倍総理の地元で、安倍家は江戸時代、大庄屋を務めていました。新羅の王子アメノヒボコゆかりの出石で生まれた鳥が、総理の地元を訪れてから韓国に渡り、その後、日米韓の首脳会談が開かれました。なるほどコウノトリは瑞鳥（めでたい鳥）であり、霊鳥（神霊がやどるとされる神聖な鳥）でした。

同じ時期、コウノトリ文化館では「人工飼育の昔と今」という展示が行われ、初期の孵卵器等が置かれていました。

コウノトリの人工飼育は、1965年に始まりました。最初の20年間に産まれた卵は合計55個。どれ一つとして孵ることはありませんでした。

最初のヒナが誕生したのは1989年、人工飼育の開始から実に25年目の春のことでした。その辛い時代の象徴とも言える孵卵器です。

あれから長い時間と膨大な努力が経過しました。今では75羽が、再び自由に豊岡の空を飛んでいます。

慶尚南道ラムサール環境財団の方からの確認情報が入ったとき、県立コウノトリの郷公園の園長であった増井光子さんと研究部長であった池田啓さんのことを思い浮かべました。お二人ともコウノトリの野生復帰に情熱を燃やし、道半ばで亡くなりました。

韓国では来年春にコウノトリの放鳥が予定されています。かつて放鳥前に野生のハチゴロウが飛来し、私たちにコウノトリと共生する具体的イメージと勇気を与えてくれたように、豊岡生まれの鳥が韓国の人々に勇気と希望を与えてくれるものと信じます。

願うこと、願い続けること、投げ出さないこと。改めてその言葉が浮かびます。乾杯！